

[25]

氏名	植木美千子
博士の専攻分野の名称	博士(外国語教育学)
学位記番号	外博第12号
学位授与の日付	平成26年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Study Abroad and Motivation to Learn a Second Language: Exploring the Possibility of the L2 Motivational Self System
論文審査委員	主査教授 竹内 理 副査教授 八島 智子 副査教授 吉田 信介 専門審査委員 准教授 中田 賀之 (兵庫教育大学)

論文内容の要旨

植木美千子氏の博士学位請求論文 *Study Abroad and Motivation to Learn a Second Language: Exploring the Possibility of the L2 Motivational Self System*. (海外留学と第二言語学習動機: 第二言語動機づけ自己システムの可能性を探る) は、4つの実証研究を中核として、以下の7章から成り立っている。

第1章: Introduction (序章)

第2章: Literature Review (先行研究の概観)

第3章: Study 1 (研究 1 *The L2 Motivational Self System* の拡張に向けたパイロット研究)

第4章: Study 2 (研究 2 *The L2 Motivational Self System* 拡張モデルの妥当性に関する検証)

第5章: Study 3 (研究 3 拡張モデルを利用した、海外留学が学習者の情意面へ与える影響に関する量的検証)

第6章: Study 4 (研究 4 海外留学がもたらした情意面での変化の背後にあるプロセスに関する質的検証)

第7章: Conclusion (結論 結論と示唆)

References (参考文献、178点)

Appendices (A-D) (付録)

本論文では、日本人大学生英語学習者を対象として、まず (1) Dörnyei (2005, 2009) らが提唱する *The L2 Motivational Self System* (以後、L2 MSS) の枠組みを、先行研究などの知見にもとづき拡張し、(2) この拡張版 L2 MSS の妥当性を統計的に検証していく。その後、拡張版 L2 MSS の枠組みの下で、(3) 海外留

学 (Study Abroad : 以後 SA) プログラムの影響を、情意面 (L2 動機、L2 不安、自己効力感などや、それら相互の関係性) の変化に着目して、量的研究手法を用いて探っていく。これに加えて、本研究では、(4) SA によってもたらされた情意面における変化の背後にあるプロセスについても、質的研究手法を用いて記述していく。最後に、得られた知見をもとにして、(5) 研究面および教育面において、いくつかの提案を行う。

本論文は、4つの実証的研究を含む、全7章から構成されている。第1章では、今回の研究を始めるに至った社会的背景、理論的背景について概観したのち、本論文の概要(章立て)について解説する。ここでは、まず日本人大学生に見られるSAを忌避する傾向、つまり「内向き志向」について言及したのち、これが社会的・経済的状况よりも、むしろ日本人大学生の内面的なもの(情意面)に起因しているのではないかと論じる。その後、この傾向を改善するためには、SAの利点をはっきりと示し、学生およびそのステイク・ホルダ(利害関係者)をSA参加に向けて説得しうるような実証的データが必要であると主張する。続いて、SAの利点に関する研究を概観し、これらの研究では、その焦点が言語能力の向上に向けられる傾向が強く、情意面の変化については、比較的手薄であることに言及する。また、情意面の研究では、昨今、*self*(自己)という概念が注目を集めていることにも触れ、この*self*を含んだ研究の枠組みとしてL2 MSSを導入し、この枠組みの拡張可能性などについて言及していく。上記のような議論を受けて、第1章末においては、本論文の各章において、どのような問題を取り扱っていくのかについて詳述する。

第2章では、本論文のテーマである、SAとL2 MSSに関する文献レビューを行う。この際、これまでに刊行された研究を出来るだけ多く渉猟するような網羅的な手法を採らず、本研究で明らかにしたい課題に関係する研究だけを、関心相関的に選び出し、まとめていくような方法を採用した。ここでは、まず、SA研究について概観し、その研究が第二言語(L2)能力、特にL2口頭運用能力の研究に偏りがちであることを明らかにする。続いて、聴解・読解・作文などの能力が、どのようにSA研究で検証されているかについても論じる。その後、情意的な側面(たとえば、L2動機づけやL2不安、自己効力感など)が、これまでのSA研究でどのように取り扱われてきたかについて概観する。この結果、情意面の研究は比較的限られており、*self*を取り扱ったような研究も緒についたばかりであることが指摘される。筆者は、次に、SAにおいて学習者の情意面での変化を本格的に研究するには、L2 MSSの枠組みが有望であると考え、この枠組みがどのような歴史的経緯と、社会的な変化に伴い形成され、提案されて

きたのかについてまとめる。その後、この枠組みが依拠する心理学の理論について言及したのち、枠組みの構成要素と仕組みについて詳述する。加えて、この枠組みにおいて、どのような研究の方向性と拡張可能性が考えられるかについても、詳しく検討する。

第3章では、SA研究により適した枠組みへとL2 MSSを拡張していくことが可能かどうかについて、パイロット的に検証した研究(Study 1)を報告する。研究への参加者は、約1年間のSAを控えた日本人大学生英語学習者126名。本研究では、(1)理想L2自己(*the Ideal L2 Self*)に2層を設けること、つまりマクロとミクロの理想自己を設けることで、より説明力の高い枠組みが提案できるのか、(2)「理想自己に関連する情報量の多寡」という概念を導入することで、(より明瞭な)理想L2自己形成の過程が説明できるのか、および(3)L2動機づけだけではなく、L2不安や自己効力感と理想L2自己との関係性についても、今回の枠組みの中で統合的に説明できるのか、を検証することが目的となった。データ収集は質問紙を用いて行った。共分散構造分析(SEM)を使用した検証の結果、(a)理想L2自己に2層を設けることで妥当性の高いモデルが得られること、(b)情報量の多寡が理想L2自己の明瞭性と関係すること、および(c)理想L2自己との関係性で、L2動機づけやL2不安、自己効力感などを論じることが可能であるということなどが判明した。また、この研究では、(d)マクロな理想L2自己に働きかけることでL2動機が高められる可能性があること、および(e)ミクロな理想L2自己に働きかけることでL2不安が軽減できる可能性があること、なども明らかになった。

第4章では、Study 1の結果を受けて、義務L2自己(*the Ought-to L2 Self*)やL2学習経験(*the L2 Learning Experience*)というL2 MSSの他の重要な構成要素も含んだ、いわばフルシステムの枠組みの下で、(1)理想L2自己にマクロとミクロの層を設けることでより説明力の高い枠組みが提案できるのか、(2)「理想自己に関連する情報量の多寡」という概念を導入することで、より明瞭な理想L2自己形成の過程が説明できるのか、および(3)L2動機づけだけではなく、L2不安や自己効力感と理想L2自己・義務L2自己・L2学習経験との関係性についても、拡張版のL2MSSの中で統合的に説明できるのか、を検証した(Study 2)。研究への参加者は、約1年間のSAを控えた日本人大学生英語学習者151名で、Study 1の参加者とほぼ同様の学習環境とL2能力を有していた。データの収集は、Study 1で用いた質問紙へ項目を追加したものをを用いた。共分散構造分析(SEM)を用いた検証の結果、(a)理想L2自己に2層を設けることで妥当性の高いモデルが得られること、(b)情報量の多寡が理想L2自己の明瞭性と関係

すること、および (c) L2 動機づけだけではなく、L2 不安や自己効力感と理想 L2 自己・義務 L2 自己・L2 学習経験との関係性についても、拡張版の L2MSS の中で統合的に説明できることなどがわかった。また、この研究では、(d) 日本人英語学習者の場合、義務 L2 自己よりも、理想 L2 自己と L2 学習動機がより関連していること、(e) 他者（親や仲間）の影響が義務 L2 自己を介して L2 不安を形成し、L2 動機づけに悪影響を与えていること、なども明らかになった。

第 5 章では、上述の 2 章（第 3 章、第 4 章）の結果をもとに提案された拡張版 L2 MSS の枠組みを用いて、学習者の情意面への SA の影響について検証を試みた (Study 3)。研究への参加者は、約 1 年間の SA を経験した日本人大学生英語学習者 151 名で、Study 2 への参加者と同一のメンバーであった。データは、Study 2 で利用した質問紙（一部削除）を用いて収集した。ただし、本研究では、英検準 1 級用の *Can-do List* を用いて、英語力の変化についても調べることにした。質問紙と *Can-do List* は SA 前と SA 後に 2 回にわたり実施された。なお、本 SA プログラムは、米国の大学において、おおよそ 1 年間継続されており、参加者たちは、前半では、学部正規科目の受講に向けて ESL コースで英語能力の向上に励み、後半においては、一定の英語能力基準をクリアしたものは、学部で正規授業を受講していた。分析は、多母集団分散構造分析 (*multi-group SEM*) を用いておこなった。その結果、2 つの集団 (SA 前と SA 後の参加者を別集団と仮定) に同一の SEM モデルが適用できるが、要因間の関係性の強さに違いが出るとした測定不変モデルが支持された。そこで、このモデルを利用して、SA 前後における各要因の影響力の違いと、要因間の関係性の強さの違いについて検証を行った。結果として、SA 後は (a) L2 不安が有意に低下し、(b) L2 動機づけと英語能力の間により強い関係性が見いだされ、(c) 義務 L2 自己の L2 不安への影響も有意に低下し、(d) 理想 L2 自己、自己効力感、L2 学習姿勢 (*L2 learning attitude*) に加えて義務 L2 自己までが、L2 学習動機を有意に支える構図が明らかとなった。筆者は、この (d) に関してさらに考察を行い、「動機づけの堅牢性」 (*robustness of L2 motivation*) という概念を提唱し、SA により、動機を支える 1 つひとつの情意要因の影響がより強化されるだけでなく、動機を支える情意要因の数までが増えていき、その結果、L2 学習へのより強い動機づけが得られるのではないか、と主張している。

Study 3 では、確かに動機づけを支える要素間の関係性の変化については記述できたが、この変化が、「どのようにして」、そして「なぜ」生じるのかという問題までは踏み込めないままであった。そこで、第 6 章では、質的研究手法を用いて、この問題に取り組むことにした (Study 4)。ここでは、まず、上述した

「どのように」そして「なぜ」という問題の解決のためには、質的研究手法が適しているということについて、Ushioda (2009) の考え方などを援用しながら、説明をしている。その後、(Study 4 で採用した) インタビュー法を用いた質的データ収集法の詳細 (たとえば、3名の学習者を一定基準で選出し、3回にわたり45分から60分程度のインタビューを実施など) について、解説が加えられている。また、インタビュー対象者とインタビュー実施者のプロフィールについても、Richards (2011) に従って、詳しく説明をしている。これらの解説の後、Study 3 で (L2 動機づけへの) 影響の顕著な変化が認められた (1) 義務 L2 自己、(2) 自己効力感、そして (3) L2 不安に焦点を絞り、変化のプロセスを記述する事例 (エピソード) を抽出し、解釈を行った。この解釈については、筆者の提示した初期案をもとにして、参加者全員が同意するまで、何度も話し合いながら、解釈を再構築していくという手法を用いた。結果として、(a) SA を経て、義務 L2 自己がどのように理想 L2 自己に近い形に変化し、L2 動機を支えるに至ったのか、(b) 自己効力感の内容がどのように変化し、そのため、L2 動機づけへの影響力が SA 後に増したのか、そして (c) SA 後に、どのように L2 不安が軽減し、動機づけへの負の影響が弱まったのか、という3つの個別プロセスの詳細が提示された。

本論文の最終章である第7章では、まず、4つの実証研究の結果の要約が提示される。その後、上述の研究における限界点についての言及があり、今後の研究での改善方策も提示される。これに続いて、本論文の締めくくりとして、今後の研究の方向性と教育面での示唆が述べられる。研究の方向性としては、(1) 情意面での研究では要因を個別に取り扱うのではなく、相互の関連性をベースに、*self* の概念などを入れながら統合的に記述することが大切であるということ、および、(2) 量的研究手法と質的研究手法を上手く組み合わせることにより、事象の変化の記述と、その背後にあるプロセスの解明が可能なること、の2点が強調されている。後者については、4つの研究を通して、(a) L2 動機を高めるための働きかけや L2 不安を軽減させる方法についての知見が得られたこと、(b) より鮮明な理想 L2 自己のイメージ形成のための方法についての知見が得られたこと、および (c) SA が L2 学習の動機づけ、および L2 能力の向上においてきわめて有効であり、日本人大学生の「内向き傾向」打破のために、強く推奨されるべきプログラムであることが述べられる。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：竹内 理、加藤雅人、沈国威）は、植木美千子氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうか確認した。その結果、同氏は、1）必要単位（10 単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で 2）論文 5 編（査読あり国際誌掲載論文 2 編、査読あり全国学会紀要掲載論文 1 編を含む）、3）口頭発表 8 回（うち国際大会 4 回、全国大会 4 回を含む）を有し、4）博士論文聴聞会（平成 25 年 5 月 25 日）も重大な問題の指摘なく終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（平成 25 年 7 月 24 日開催）に報告し、同氏からの論文提出を承認する決議を得た。これを受けて平成 25 年 9 月 24 日に植木氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（平成 25 年 10 月 9 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：竹内 理、副査：八島智子、副査：吉田信介、学外委員：中田賀之兵庫教育大学大学院准教授）での審査に入った。また、同時に所定の閲覧期間と手続きをもって、研究科構成専任教員への論文開示も行った。

提出された英文論文（140 頁）では、広範囲に文献の渉猟を行っており、References に記された参照論文の数は実に 178 編にのぼる。これらの文献を研究テーマとの関連性から精査し、SA 研究や L2MSS 研究の課題を明らかにし、その後に、この 2 つの研究分野（SA と L2MSS）を統合する 4 つの実証研究に着手したことは、手法の手堅さの面から高い評価に値するものと言えよう。また中心となる実証研究で、SEM や multi-group SEM などの統計手法を採用しながらも、得られた結果の背後にあるプロセスを質的な方法を通して詳細に説明しようとしている点は、植木氏の堅実さと柔軟性の両面を感じさせる。

上記に加え、以下の 8 点からも、本論文は優れているものと判断することができる。

- (1) L2MSS の拡張に関する提案 (*the Ideal L2 Self* に 2 層を設けることと、*the Ideal L2 Self* に関わる情報量の概念の導入) を行い、この拡張版 L2 MSS の妥当性を実証的データに基づき検証したこと、
- (2) 拡張版 L2MSS の枠組みを利用して、学習者の情意面に対する SA の影響を検証したこと、
- (3) その際、複数の情意要因間の関係性とその強さの変化を、L2MSS という 1 つの枠組みの中で実証的に示したこと、
- (4) 情意面での変化と言語面での変化を、L2MSS という 1 つの枠組みの中で関連づけたこと、
- (5) SA の影響を 1 年間にわたり量・質両面で追跡し、両者を照らし

- 合わせるという独創性のある手法を導入したこと、
- (6) 学習者の情意面に対する SA の影響を、*robustness of L2 motivation* という独自の概念を提案して説明しようとしたこと、
 - (7) 日本人大学生の「内向き」志向打破のためのデータを、具体的に提供したこと
 - (8) 本博士論文の基礎となった論文が、国際学会の Asia TEFL から出版されている紀要や、Taylor & Francis 社から出版されている専門研究誌に受理・掲載されるなど、研究の国際性が確認されていること。

以上より、植木美千子氏の学位請求論文が、研究の方法や内容、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準にあることを、審査委員会一同が認めた。